

昭明『文選』における「詠懷」の成立について

藤 井 良 雄

(平成四年九月十日受理)

一

阮籍「詠懷」五言詩八十二首と一般的に呼ばれるが、「詠懷」という詩題と具体的な八十二首という実数が定立するのはいつのことからであろうか。いまだ昭明太子(五〇一―五三二)の『文選』および李善注においては「八十余篇」という概数なのである。残存詩の数という量的な問題であるかに見えるが、試みに各本が最終に配置する第八十二番目の「詠懷其八十二」を読んでみる。

墓前發發者 墓前の發發たる者、

木槿耀朱華 木槿は朱華を耀かす

榮好未終朝 榮さき好きも 未だ終朝ならざるに

連颺隕其葩 連颺 其の葩を隕とす

豈若西山草 豈に西山の草

琅玕與丹木 琅玕と丹木とに若かんや

垂穎臨層城 垂るる穎 層城に臨み

餘光照九阿 餘光 九阿を照らす

寧微少年子 寧に 少年子

日久歎咨嗟 日久しくして歎き咨嗟するなからんや

墳墓のあたりに、盛んに花咲いているむくげは、その紅い花を輝かしている。美しく花咲いているが、朝の間も過ぎぬうちに、たて続けのつむじ風にその華を吹き隕されてしまう。これではどうしてあの西山に生えている草、琅玕や丹木とに比べられようか。それらの神木は抜きんでて崑崙山の層城を臨んでいるが、(層城に沈む)西日の餘光は、九阿に見える陵墓のあちらこちらを照らし出す。どうして若者たちが、長き日々何日も落胆歎くことなしに過されようか。

この其八十二の詩のイメージは、すでに本詩までの詠懷詩中の詩語によって形成されていることが指摘できる。第一聯「墓前發發者 木槿耀朱華」は、其七十一の「木槿 丘墓に榮さき 煌煌として光色有り」や其十八の「彼の桃季の花を視、誰れか能く久しく發發たらん」の表現に拠る。第七句「垂穎臨層城」は、其四十五の「修竹 山陰に隠れ、射干(西方の木)層城に臨む」に、第八句「餘光照九阿」は其八の「灼灼たり

西に墮^おつる日、餘光 我が衣を照らす」に似ている。詩中に見える「西山」「日夕」という詩語も、其二十六に「朝に洪波の順きに登り、日夕、西山を望む」と使用済みであった。崑崙山に生えている「琅玕」樹も其二十一「琅玕 高山に生じ 芝英 朱堂に輝く」と其八十一「朝に餐す 琅玕の実 タベに栖む 丹山の際」と、すでに二例見える。そして、黄節はその『阮步兵詠懷詩注』其八十二の締めくくりに「此の首、其四十四(其21)・其七十一(其66)の両詩と辞意略ぼ同じ。」と「案語」を附している。端的に言えば、曾國藩が『十八家詩抄』において「此れ其四十四・七十一首と語意重複し、別に精義なく、疑うらくは、亦た後人之を附益せしなり」と²⁾と断言したごとく、後世の摺作が混入しているのである。してみれば、残存する詩の数の問題も、後人が阮籍の「詠懷詩」に感動し諷誦するほどに模作されたにちがひなく、詠懷詩の内容にかかわるところがある。

また最近一九八四年に、引用した黄節の『阮步兵詠懷詩注』が人民文学出版社から「華忱之 校訂」、「句号」を用いて校点されて重刊されているが、これまで目睹できなかった「阮步兵詠懷詩注補篇」四言詠懷詩十三首が附印されている。これは黄節が阮籍五言詠懷詩注を完成して五年後の一九三〇年、「四言詠懷詩十三首」に注したものである。遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』も、この四言十三首を阮籍の「詠懷詩十三首」(魏詩卷十)と認め採録している。ならば阮籍の詠懷詩が九十五篇にも上ることになり、「八十余篇」にも相違する。

たしかに『晉書』阮籍伝は、「詠懷詩八十余篇を作り、世の重んずる所と爲る。」と述べているが、『晉書』は唐の李世民治下、貞觀二十年から二十二年(六四八)にかけ三年足らずで成書をみた正史であり、すでに『文選』中「卷」十三の次行に「詠懷」という詩題が成立した後の史

料であり、それに従った「詠懷詩八十余篇」であって、実証的根拠に乏しい。

詠懷詩の系譜は、阮籍の五言詩から綿綿と中国古典詩の中に続くものであり、小論において「詠懷」詩成立の状況を再検討し、冒頭に提出した課題について、微力ながら解答を試みるのも、詠懷詩研究の一端として意義なきものではないであらう。

二

日本でも、一学説が枢要の地位にある權威によって一旦となえられると、往々何ら批判や見きわめを受けず、学会にそのまま受け入れられることがある。上述したごとく、阮籍の詩については、五言詩八十二首であらうと四言詩十三首であらうとすべて同じ「詠懷詩」という詩題が冠せられている。吉川幸次郎氏も一九五六年に発表された論文「阮籍の詠懷詩について」の冒頭部分に於いて、次のように記している。

三世紀のなかばの思想家である魏の阮籍(二一〇—二六三)、字は嗣宗は、その詩人としての業績を、詠懷、懷を詠う、と総題しつつ、四言の詩形のもの三首と、五言の詩形のもの八十二首とを、今に伝える。うち人人が伝誦するのは、その五言の詩、ことに梁の昭明太子蕭統(五〇一—五三二)の『文選』にえらばれた十七首であるが、八十五首の全貌を示すものとして現存最古のテキストは、明の馮惟訥の『古詩紀』である。もっとも『古詩紀』も、篇の排列については原形をうしなっているらしく、五言詩八十二首のうち、はじめにおかれた十七首が、『文選』所収のもののみであるのは、がんらいの篇次ではあるまい。

この文章は阮籍本人が自己の詩に「詠懷」という名をつけ「総題」したと読まざるをえない。その後、一九六七年に公刊された鈴木修次氏の『漢魏詩の研究』においては、わざわざ「詠懷詩」ということは、阮籍に始まる」と記す。

詩歌に老莊的思想がはじまる例は、漢魏の古詩・古歌においても時にみられる。しかし、詩人が自覚した哲学として、老莊思想を詠懷詩ふうに詠ずる例は（詠懷詩ということばは、阮籍に始まる）、やはり阮隅（阮籍の父・引用者注）の「隱士」を以ておおむねのきがけと見てよいであろう。

こればかりでなく、松本幸男氏『阮籍の生涯と詠懷詩』（一九七七年）や大上正美氏『中国古典詩聚花 思索と詠懷』（一九八五年）等、詠懷詩を論ずる書籍は、阮籍と詠懷詩との一組の存在を自明のものとしている。以前論者は小グループで、上海古籍出版社『阮籍集』（一九七八年）を底本とし、遼欽立纂輯『先秦漢魏晉南北朝詩』収載の四言十三首をも含めて『阮籍集索引』（一九八五年）を作成した折、阮籍の作品中に「詠懷」あるいは「述懷」というような言葉を見つけ出せず、「詠懷詩」ということは、阮籍に始まる」という根拠をつかむことは出来なかった。

因みに『阮籍集索引』には、「阮籍『詠懷詩』番号各本対照表」を附したが、この表から判明するように馮惟訥（嘉靖十七年・一五三八進士）の『古詩紀』から八十二首を並べているように思われる。というのは、嘉靖の前、正徳年間（一五〇六―二）に李夢陽（一四七二―一五二九）序刊の『阮嗣宗詩』一巻の彼の序には「今、故と抄する所の籍の詠懷詩八十篇を以てこれを此に刊し、訛缺は姑く之に仍れり。」と記しており、まだ八十首を刊するだけであつたからである。それが明末清初になると、張溥（一六〇一―四一）が編した『漢魏六朝一百三家集』の阮籍集を初めとし

て、ほとんどが八十二首を配列している。明代後半、『古詩紀』の刊行からこの張溥の出版によって、阮籍の全詠懷五言詩が網羅されたとみなされたことにより、この時代、「詠懷詩」を作ることが流行していた。次の呉懋謙（一六五五年前後在世）の「長安詠懷」序には、「阮步兵詠懷詩八十二首」と見える。

阮步兵の詠懷詩八十二首、時、魏晉に値ひ、文隱にして旨遠く、人測るに易からず、戊戌（一六五八年）都門に客たりて、甚だ多き詠懷を聞見せり。⁵⁾

このような呼称は、現代の呼び方と同じであり、詠懷八十二首が定立したのは明末清初からではなからうか。

「詠懷」という詩題は、阮籍自身のものではないという疑念から、まず先に「八十二首」という定数化の点に話がそれたが、上に引用した明の李夢陽の「序」のみならず、清の袁枚（一七二六―九七）も「阮步兵集五言八十篇、四言十三篇、題して皆詠懷と曰ふ」と『隨園詩話』巻七に記しているところからすれば「八十首」とか「八十余篇」とか呼ぶ方が、真実に近いのではないか。

さて、「詠懷」という詩題も、この詩数と同様な問題が横たわっている。八十二という数は、阮籍の五言の詩をとにかく集めて数えてみたところ結果として八十二首であつたのであり、阮籍の五言詩を愛読した結果、八十首を一つの連作として総称できる名称「詠懷」と名付けられたのであろうと推測できる。以下に述べるように詩題と詩数との呼称は、軽視できない問題点が存在する。では、一体いつの時代、誰によって阮籍の五言詩に対して「詠懷」という総称が附されたのであろうか。

三

本論の課題として問題点について、すでに中国でも日本でも、管見の及ぶかぎりではあるが、書面上一人ずつ言及がある。論を進捗する上で大いに参考となる点があるので以下に、要点を引用したい。

まず日本では、「阮籍五言詠懷詩小考」の甲斐勝二氏の論文前半の考証である。

阮籍の詠懷詩の詩群については、詠懷という一つの題の下に統括されているけれども、すべてが同時期に作られたものではなく、時々には作られたものが集められていると考えるが定説である。

ここでは、初めに、この八十二首の詩篇がいつごろどのようなして詠懷の名の下にまとめられ、恰も一種の連作の如く見える詩群として成立したのかという問題を検討する。……これまでは阮籍自身を論じるのに急で、この問題が正面から取り挙げられた事はなかった。しかし、この問題の検討は、そこに集められた詩篇の基本的な性格を考える上で、貴重な示唆を与えてくれるはずである。

さて、この詠懷の題名を持つ詩群が初めて文献上に現われるのは、佚文として残る臧榮緒(四一五—四八八)の『晋書』である。

籍、善く文を属る。初めより苦思せず、率爾に便ち成る。五言詠懷八十餘篇を作り、世の重んずる所と爲る。

ところで、『文選』に収められる詠懷詩十七首には顔延之(三八四—四五〇)の注が残っている。その注の中で、顔延之は、説者あり、阮籍、晋文の代にありて、常に禍患を慮る、故に此の詠を発す耳と。

と述べている。「此の詠」という所から推すると、彼が注をつけた頃にはそれらの詩群に既に詠懷の名はあったに違いない。

と史料に基づいた考証を展開し、甲斐氏は顔延之が詠懷詩の注を作った大よそ三年後ぐらいに裴松之(三七—四五二)が陳寿(二三—九七)の『三国志』注を完成しているが、裴松之が阮籍の詠懷詩に何ら言及していないのは、「裴松之は阮籍の伝記に詠懷詩は無用と見ていた事になる。」と主張し、まだ顔延之の注のつけられた詠懷詩群は世に顕れていなかったとし、結論として次のようにまとめている。

つまり、阮籍の作として伝えられていたものの、文章家としての彼の影に隠れて注目される事がほとんどなかった詩篇のかずかずを、顔延之が注を作った頃に何者かが集め、それらを一括して詠懷と命名したと考えるのである。

甲斐氏が結論を導くために考証に使用した史料は、主として『文選』の李善注引用のものである。「詠懷の呼称が初めて文献上に」登場する臧榮緒の『晋書』も、今は『九家旧晋书輯本』に集められているが、阮籍の史料は李善注に引用されていたものが多い。李善注を読む場合、必ず各版本(単注本・六臣注本・六家注本系統)の異同を確認した上で、どれが原初の形に最も近いものかを思考して利用されねばならない。甲斐氏が引用した臧榮緒『晋書』は、『文選』巻二十一「顔延年『五君詠五首』」阮步兵・李善注からのものであるが、この佚文は同じものが『文選』巻二十三「詠懷十七首」阮嗣宗(六臣本系)の下にも李善によって引用されている。問題部分の原文は次のごとくである。

李善曰 臧榮緒晋書云……籍属文初不苦思、率爾便作、成陳留八十餘篇。

このように、前の引用では「籍善属文論、初不苦思、率爾便成、作五言

詠懷詩八十餘篇、為世所重。」とあったが、「詠懷」がもともと「陳留」となっている。また「率爾成陳留八十餘篇」となっている李善注テキストもある。さらに結論を先取りした言い方をしているのが、一九八七年に公刊された陳伯君遺著『阮籍集校注』の「詠懷五言八十二首」集評の按語には、「按：據臧榮緒『晉書』、阮籍所為八十餘篇名『陳留』。『詠懷』之名、疑為梁昭明太子蕭統選錄十七首時所加。」と付して、阮籍の五言詩は、陳留で作られたから「陳留」という名前であったが、梁の昭明太子蕭統が『文選』に十七首を選録したとき付け加えたのであろうというのである。同じ『文選』の李善注から、阮籍の残した八十餘首の詩が、ただ「陳留八十餘篇」と総称されてはいたが、決していまだ「詠懷」と呼ばれてはいなかったことが判明する。

次に李善によって「詠懷詩十七首」の詩題下に附せられている顔延之の「説者、阮籍在晋文代、常慮禍患、故發此詠耳」という注の「此の詠」であるが、この「詠」は、普通名詞的な詠歌とか「詠発す」にあたる「詠」で、いまだ詩題として固定した「詠懷」の「詠」ではない。むしろ、顔延之のこうした「發此詠耳」という言い方が「詠懷」という詩題を浮かび上がらせる機縁となったのであろう。というのは、顔延之と臧榮緒との年齢差があり、臧榮緒が『晉書』を著したのは、顔延之が「五君詠」の第一首で「阮步兵」を詠った時および阮籍五言詩の注を作ったとされる元嘉三年（四二六・顔延之は三八四生れ・臧榮緒は四一五生れ）頃より、かなり後のことで、その「阮籍伝」には彼の詩を「陳留八十餘篇」と記して称賛していたのである。それに対し、顔延之の注には詩数が無いのも疑問となる。さらにもし、顔延之の時代までに、後世のように詠懷といえは阮籍、阮籍といえは詠懷詩というような模式が成立していたのであれば、後世の詠懷詩たとえば呉応箕（一五九四～一六四五）の「詠懷

詩詞を好み 能く愧^く、慙^くじる無からんや」（述懷「其四」）や侯方域（一六一六～一五四）の「歩兵 至慎と称せられ 常に詠懷詩を為くる」（詠懷「其十三」）のごとく、顔延之も必ずその阮籍を詠じた「五君詠・阮步兵」詩のなかで「詠懷」詩のことを歌い込んだにちがいないはずである。

四

次に中国では、すでに引用した陳伯君（一八九五～一九六九）遺著の『阮籍集校注』の「序」に見える説である。阮籍には「大人先生伝」等の散文もあるが、もしかしたら彼の作った散文がもとと多くはなく、流伝したものも寥寥たるもので、それで同時代と後世への影響が大きくなったかも知れないという文章に接続する一段落である。

阮籍的「詠懷」詩則不然、千餘年来、雖一直為人所謂諷誦、但正如嚴羽（南宋・生没年不詳）所説「厥旨淵放、歸趣難求」（『滄浪詩話』）、是那麼難於捉摸、這些詩不是成於一時、也並非特意而作、只是隨時抒感、後人在編輯這些篇章時、憑所得的一個概括的印象而加上了「詠懷」這個題目、因此很不容易把它的真意一句一字地誦讀。就是和他的時代比較接近、而本人又是很有成就的詩人、如顔延之・沈約諸人、也祇能總説一句是「憂生之嗟」。儘管如此、這些詩讀起來是很美的。（阮籍の『詠懷』詩は後世への影響が小さくなく、千年あまりこのかた、ずっと人々から諷誦されてきたのだが、ただまさに嚴羽の説くように「厥の旨淵放にして、歸趣求め難し」（『滄浪詩話』）であって、それほどに与えがたい。これらの詩は一時に作られたものでなく、わざわざ作ったものでもなく、ただその時その時に感情を抒べ、後人がこれらの篇章を編輯するとき、その人が受けた概括的印象によって『詠懷』という題目を加えたに過ぎ

ず、このためその真意を一文一句ずつ読み解くのが容易ではない。たとえば、阮籍の時代とかなり接近しており、本人も又た非常に成就がある詩人たといば顔延之・沈約などの人でも、ただ一言総説できたのは「憂生の嗟」と述べえたにすぎぬ。たとえこのようであらうと、これらの詩は読んでみるとやはりとても美しいのだ。『阮籍集校注』序。)

この説明はまさに人を納得させるものであろう。陳伯君の具体的な論説は『臧栄緒『晋書』に拠れば、阮籍が為くった八十餘篇は「陳留」という名であった。『詠懷』の名は、おそらく梁の昭明太子蕭統が十七首を選録したときつけ加えたのであろう。」という結論である。この結論は方向性としては誤りではないであろう。袁枚が次のごとく述べているのが「詩文集」の成立と名付けとの実際に近いと思われるからである。

詩文集之名、始東京。隋經籍志曰「集之名、東京所創。」蓋指班史某人幾篇、某人詩幾篇而言。後人集之、非自為集也。齊・梁間始有自為集者。王筠以一官為一集、江淹自名前後集、是也。有一人之集、止一題者。阮步兵集五言八十篇、四言十三篇、題皆曰詠懷。應休璉詩八卷、總名曰百一詩、是也。(詩文集の名は東京(後漢時代)より始まる。隋書經籍志曰く「集の名、東京創る所なり。」とは、蓋し、班固(三二・九二)の史(漢書藝文志)の「某人 文幾篇、某人 詩幾篇」を指して言ふなり。後人之を集め、自ら集を為くるに非ざるなり。齊・梁の間(四八〇・五五七)始めて自ら集を為くりし者有り。王筠(四八一・五四九)一官を以て一集を為くり、江淹(四四四・五〇五)は自から「前後集」と名づくる。是れなり。一人の集、止だ一題のみなる者有り。阮步兵集五言八十篇、四言十三篇、題して皆「詠懷」と曰ふ。應休璉(一九〇・二五二・應璩)の詩八卷、總べて名づけて百一詩と曰ふ。是れなり。『隨園詩話』卷七。)

ここで指摘されているように、中国では梁時代になって始めて、文人

が自らの作品を集めて詩文集を作るようになる。当然その前には、過去の人の作品を後人が集め文集を作ることが行われることが前提となる。

『隋書經籍志』を見れば、個人の詩文集はもとより、齊梁の以前・宋代から、劉義慶によって『集林』一百八十一卷というような巨大な總集まで編輯されていたことが判明する。ならば、阮籍の詩もこの時代の文学氣風のなかで印象的で概括的な「詠懷」という呼び名が付けられ、できうるかぎり搜集され始めたとみる方がよい。

昭明『文選』以前の總集がすべて亡佚している以上、確固として実証できうることはないが、晋以後、宋齊梁の間のいつかに「陳留」という名が「詠懷」という時代にマッチした名前にかえられ集められていたのを、昭明太子の名によって公的に追認されたとみるべきであらう。ならば、「詠懷」という用語によって、『文選』以前の詠懷詩はどこまで溯ることができであらうか。

五

阮籍(二一〇・二六三)以後、「詠懷」「述懷」を詩題とした詩は、晋の太康年間(二八二・二九〇)著作佐郎であった張載の四言詠懷詩がまず出現する。この詩は『文選』卷二六の顔延之「和謝監靈運一首」の「朋好雲雨」の李善注が引用する「張載詠懷詩曰雲乖雨散、心乎愴而。」というものである。ただ一聯だけの四言佚詩なので、阮籍の詩の影響があるかいか判明しがたい。『文選』の「詠懷」は五言詩についての詩題であるから、この張載の四言詠懷詩はひとまず思考の対象から除外できる。しかしながら、阮籍亡きあと、次の晋代の詩にはもうすでに彼の詠懷詩の影響が見受けられる。例えば陸機(二六二・三〇三)の「贈顧彦先詩」には、

清夜不能寐 清夜 寐ぬる能はず
悲風入我軒 悲風 我が軒に入る
立影對孤軀 立影 孤軀に對し
哀声応苦言 哀声 応に苦言すべし

の表現があるが、前二句は阮籍「詠懷」其一の「夜中不能寐 起坐彈鳴琴 薄帷鑒明月 清風吹我襟」を踏まえたものであろう。明らかに表現上の影響関係が認めうる。陸機以後『文選』に関わった人まで、阮籍の五言詩の影響が見うけられるものを列挙する。

陸機 (二六) (二二) 贈顧彦先詩

支遁 (一) (二二) 詠懷詩五首・述懷詩一首〔弘明集卷三十〕

史宗 (一) (一) 詠懷詩〔高僧伝〕

謝靈運 (三六) (四三) 秋懷詩〔文選卷二十三・藝文類聚卷三作懷秋詩〕

鮑照 (四二) (四六) 擬阮公夜中不能寐詩〔本集四〕

王素 (四八) (四七) 學阮步兵體詩〔玉臺新詠四〕

沈約 (四四) (五三) 『文選』詠懷詩注〔李善引〕。

江淹 (四四) (五五) 效阮公詩十五首。阮步兵兵籍詠懷〔文選卷三十〕

吳均 (一) (二二) 詠懷詩二首。〔藝文類聚卷二六〕

鍾嶸 (四六) (五八) 『詩品』詠懷之作、可以陶性靈、發幽思。

劉孝綽 (四八) (五九) 夜不得眠詩。『文選』の実質的編纂者。

陸機の次の支遁、字は道林もとの姓は閔、陳留の人ともいわれ、ほぼ阮籍より一世紀の後の人であるが、同郷であったので「陳留八十餘篇」と呼ばれていた五言詩を読み得た可能性は大きい。けれども、今に伝わる支遁の詩は「四月八日讚佛詩」「五月長齋詩」「詠禪思道人詩」等のごとく仏道修行上の詩であり、彼の「詠懷詩」「述懷詩」も自からの哲学的思想を述べようとする意で、「詠懷」の題のごとく支遁の内面を描き出

しているのかどうか、詩として成立しているかどうか、むずかしい。「(大上正義)」と判断される。「詠懷詩」とも「述懷詩」ともいう詩題で、これらが阮籍の詩を意識しているのかどうかにわかに決定しがたい。阮籍の詩と表現上大いに異なる点を指摘するだけにとどめておこう。それは「齊魯沈情去 彩彩冲懷鮮」(其一)「蕭蕭柱下迥 寂寂蒙邑虛」(其二)「隗隗形崖頽 罔罔神宇敞」(其三)「曖曖煩情故 零零冲氣新」(其四)「冉冉年往遼 悠悠化期永」(其五)「蕭蕭猗明翫 眇眇育清軀」(述懷其二)「昭昭神火傳……齊魯隨化遷」(述懷其三)のように、すべての重言の詩語をくり返し用いている。これは詩の表現を冗長にするのではない。阮籍の五言詩と異なるところである。

晋代では同じく「釋氏」の史宗の「詠懷詩」ただ一首のみ今に伝わる。彼は「何許の人かわからず、常に麻衣を着ていたので、世人は麻衣道士と号していた」といわれる。『高僧伝』によって伝わるが、この詩が作られた状況が説明されている。

時に高平の檀祗、江都の令と為り、聞きて召来せり。(史宗の) 應對機捷にして、拘滯する所無く、博達にして稽古、玄儒を辨説せり。乃ち詠懷詩一首を賦す。檀祗、常に非ざる人なりと知り、所在に遣還するに、布二十疋を遺りしに、(史は) 悉く以て人に乞えり。

有欲苦不足 欲有れば足らざるに苦しむ
無欲亦無憂 無欲ならば亦た憂ひ無し
未若清虛者 未だ清虚なる者に若かず
帶索被玄裘 索を帯び玄き裘を被り
浮遊一世間 一世の間に浮遊すれば
泛若不繫舟 泛として繫がざる舟の若し
方當畢塵累 方當に塵累畢はるべし

栖志老山丘 老山の丘に栖志せん

この詩は、史宗を召し出さんとする江都令・檀祗に対し、自分の生き方を詠懐したのである。「有欲苦不足 無欲亦無憂」は阮籍「達莊論」の「無欲の者自ら足れり」を意識していよう。また「未若清虚者」も阮籍「首陽山賦」中の「且に清虚にして以て神を守り、豈に慷慨して之を言はんや」を踏まえているといえよう。阮籍の哲学的散文の影響は認めうるが、五言詩の影響は本詩には認めがたい。この詠懐詩は阮籍のごとく「懐いを詠じた」ものでなく、僧侶としての生き方を詠ったものだからであろう。

以上、晋までの「詠懐」「述懐」の詩題として伝わるものを読んでみたが、阮籍の五言詩を直接継承するものと決定できない。この事實は、阮籍といえば「詠懐」という模式がまだ成立していなかったことの傍証となるであろう。

さて上掲の一覧表で、次の謝靈運の「秋懷詩」は『文選』卷二十三「詠懐」のもとに「謝惠連」の詩として掲げられていて、すでに『文選』編纂時、詠懐詩の系譜に含まれるものとみなされていた。

劉宋以後、鮑照の「擬阮公夜中不能寐詩」・王素の「学阮步兵体詩」は、その詩題から判明するように阮籍の五言詩を襲っている。詩題中に「擬」「学」の字が付けられているごとく、模擬した作品であるが、その詠ずる内容は自からの情懷であろう。

漏分不能卧	漏分なるに卧す能はず
酌酒亂繁憂	酒を酌むも繁憂に乱さる
惠氣憑夜清	惠氣 夜に憑りて清く
素景緣陳流	素景 隙に緣りて流る
鳴鶴時一聞	鳴鶴 時に一に聞こゆ

千里絶無儔 千里 絶えて儔無し

佇立爲誰久 佇立 誰が為に久しからん

寂寞空自愁 寂寞 空しく愁ふ

この詩の作者鮑照、字、明遠は謝靈運、顔延之とともに「謝顔鮑」と並称される詩才すぐれた寒門出身の文学者である。彼が世に出ることができたのは臨川王の劉義慶(四〇三―四四四)に見いだされ国侍郎に任ぜられたことによる。その後臨海王劉子項が荊州の長官であったとき、彼は前軍參軍となり書記を掌り、世間では鮑參軍と呼ばれる。江陵の宋景の乱起り、乱軍によって非業の死を遂げる。彼を文学の士として遇した劉義慶は『世説新語』の作者としても有名で、鮑照もその編纂に加わったのではないかとされている。阮籍の名は、この『世説』に二十一ヶ所に見い出され、逸話にこと欠かない。しかし、『世説』には、阮籍が「詠懐」詩を作ったとは何所にも記してなく、その点では前述した裴松之の『三国志』注と同じである。もし阮籍がすでに詠懐詩の作者であると認められていたのなら鮑照の模擬も、後の庾信(五二一―五八二)のごとく「擬詠懐」という詩題になっていたであろうと思われるからである。

『世説』には「詠懐」ということが見当たらないと先に述べたが、その詩の一聯が、「豪爽」篇中に引用されている。

桓玄西下、入石頭、外白司馬梁王奔叛。玄時事形已濟、在平乘上笏鼓並作、直高詠云「簫管有遺音 梁王安在哉」。阮籍詠懐詩也。(桓玄西下し、石頭(南京)に入らんとするに、外より「司馬梁王奔叛せり」と白す。玄時に事形已に濟り、平乘(大船)上に在りて笏鼓並び作こり、直ちに高らかに詠ず。「簫管、遺音有り、梁王安くに在りや。」と。劉孝標曰く「阮籍の詠懐詩なり。」と。)

「豪爽」篇の「豪爽」とは、豪傑爽快なる人物の意であろう。ここでは荊州刺史であった桓玄（三六九～四〇四）が梁王司馬珍之が逃走した知らせを聞き、阮籍の詩の文句を高らかに吟詠したことがまさしく「豪爽」であったのであろう。ただ、「在平乘上筋鼓並作、直高詠云」のところは有名な漢の武帝の「秋風辭」の「泛樓船兮濟汾河、……簫鼓鳴兮發棹歌」を意識している表現で、この話が実話なのかどうかかわからないが、阮籍の詩が愛好されていたのは事実であろう。さらに後に、劉孝標（四六二～五二二）が注を付けているから、彼の時代には「阮籍の詠懷詩」が定立していたと考えられる。しかし、劉孝標、名は峻、考標は字の彼の伝記は、『梁書』文学伝に「伝」が作られているが、『世説』の注を書いたことは記載されていない。『隋書』経籍志に、『世説』十卷、劉孝標注とあるのが初見であるとされる。

この六世紀初頭あたりから、明確に「阮嗣宗詠懷詩」と記す書籍が出現する。まず酈道元（？～五二七）の『水経注』である。本文と該当箇所とを列挙してみよう。

①穀水亦東屈南、逕建春門石橋下。（注）即上東門也。阮嗣宗詠懷詩曰步出上東門者也。一曰上升門。（穀水是又東して南に屈し、建春門の石橋下を逕ぐ。（注）即ち上東門なり。阮嗣宗の詠懷詩（其十一）に曰く「歩いて上東門を出づ」る者なりと。一に上升門と曰ふ。卷十六・穀水注）

②又按傳暢晉書云、都水使者陳狼、鑿運渠從洛口入注九曲至東陽門。

（注）是以阮嗣宗詠懷詩所謂朝出上東門、遙望首陽岑。又言、遙遙九曲間、徘徊欲何之者也。（又た按ずるに、傳暢の晉書に云ふ。都の水使者・陳狼、運渠を鑿ち、洛口より入りて九曲に注ぎ、東陽門に至る。（注）是を以て、阮嗣宗の詠懷詩所謂「朝に上東門より出で、遙かに首陽の岑を望む」（其五十二）と、又た「遙遙として九曲の間、徘徊して何くにかんと欲す」と

言ふ者なり。卷十六・穀水注）

③其一水北流注于渭、渭水又東逕長安城北。（注）即咸陽也……昔廣陵人邵平為秦東陵侯、秦破為布衣、種瓜此門、瓜美故世謂之東陵瓜。是以阮籍詠懷詩曰昔聞東陵瓜、近在青門外、連畛拒阡陌、子母相鉤帶、指謂此門也。（其の一水は北流して渭に注ぐ。渭水は又、東のかた長安城北を逕ぐ。（注）即ち咸陽なり。……昔、広陵の人、邵平秦の東陵侯為り。秦破れ布衣と為り、瓜を此の門に種うるに、瓜美なり。故に世之を東陵の瓜と謂ふ。是を以て阮籍の詠懷詩（其八）に曰く、「昔聞く東陵の瓜、近く青門の外に在りと、畛を連ねて阡陌を抗ぎ、子と母と相ひ鉤なり帯なる。」と。此の門を指して謂ふなり。卷十九・渭水注）

④又東逕漢武帝茂陵南。（注）……漢武帝故事曰、帝崩後見形。謂陵令薛平曰、吾雖失勢、猶為汝君。奈何令吏卒上吾陵磨刀劍乎。自今以後可禁之。平頓首謝。因不見。推問陵旁果有方石。可以為礪。吏卒常盜磨刀劍。霍光欲斬之。張安世曰、神道茫昧、不宜為法。乃止。故阮公詠懷詩曰失勢在須臾、帶劍上吾邱。（又、東のかた漢の武帝茂陵の南を逕ぐ。（注）（中略）漢武帝故事に曰く、帝崩じて後、形見はして、陵の令・薛平に謂ひて曰く「吾、勢を失ひしと雖も、猶ほ汝が君為り。奈何ぞ、吏卒をして吾が陵に上り刀劍を磨せしむるか。今より以後、之を禁ずべし。」と。平頓首して謝す。因りて見えず。推問するに陵の旁に果して方石の以て礪と為すべき有り。吏卒常に盗み刀劍を磨せり。霍光は之を斬らんと欲す。張安世曰く「神道茫昧、宜しく法と為すべからず。」と。乃ち止む。故に阮公の詠懷詩（其五十四）に曰く「勢を失ふは須臾に在り、劍を帯びしもの吾が邱に上る。」と。卷十九・渭水注）

⑤渠水又北屈分為二水。續述征記曰汧沙到浚儀而分也。汧東注沙南流、其水更南流。逕梁王吹臺東。（注）陳留風俗傳曰、縣有倉頡師曠城。

上有列僊之吹臺。北有牧澤、澤中出蘭蒲。……梁王增築以為吹臺。城隍夷滅、略存故跡。今層臺孤立於牧澤之右矣。其臺方百許步。即阮嗣宗詠懷詩所謂駕言發魏都 南向望吹臺 簫管有遺音 梁王安在哉。(渠水又、北のかた屈して分れ二水と為る。統述征記曰く、坂(水)と沙(水)と浚儀に到りて分るなり。浚は東に注ぎ沙は南流し其の水更に南流し、梁王の吹台の東を遡ぐ。(注)陳留風俗伝曰く、渠に倉頡・師曠の城有り。上に列僊の吹臺有り。北に牧澤有りて、澤中に蘭蒲出づ。……梁王増築して以て吹臺と為す。城隍夷滅し、略故跡存す。今、層台牧澤の右に孤立せり。其の台、方、百ばかりの歩。即ち阮嗣宗詠懷詩所謂「駕言」に魏都を發し、南に向ひて吹台を望む 簫管 遺音有り 梁王 安に在りや」と。卷二十・渠水)

以上『水經注』に引用される「詠懷詩」である。すなわち、引用の前に「故に」とか「是を以て」の接続詞を置いている形と、「詠懷詩所謂」という形とである。このような引用のあり方から、酈道元が『水經注』の資料として「阮籍詠懷詩」と目されるようになった五言詩を使用できたのは、阮籍といえは詠懷の一セットが世に受け入れられていることを物語る。

ところで魏晉南北朝時代は、魏の曹丕の『典論』論文篇を始めとして文学批評や文学理論の専者が陸統と世に出て来た時代である。興善宏氏は「文学批評が成立するための第一の必要条件は、いうまでもなく批評の対象となるべき文学作品が存在することである。」と述べているが、阮籍の詠懷詩が批評の対象となったその端緒は、『文選』李善注が引いて利用している顔延之と沈約との「詠懷詩注」であろう。彼らが注を付けてその五言詩を顕彰せんとした「阮籍詠懷」は、まさに六朝文学評論史上の二つの代表的傑作である劉勰(四六六?~五二〇?)の『文心雕龍』と鍾

嶸(四六八~五一八)の『詩品』において、最高の段階の評価を受けている。とくに『詩品』は、その序文の末部に於いて、三世紀の建安時代から劉宋に至る五言詩の秀作を、四字の駢体にして列挙している。

陳思贈弟、仲宣七哀。 陳思の贈弟、仲宣の七哀。

公幹思友、阮籍詠懷。 公幹の思友、阮籍の詠懷。

鍾嶸は、阮籍の五言詩を端的に「阮籍詠懷」と表現したのであり、興善氏が指摘されるように「仲宣七哀」の「哀」字と「詠懷」の「懷」字が脚韻としてピッタリと押韻するべく駢体に作られた文章であった。『詩品』本文中でも、「上品」に配置され、阮籍の詩のみが詩経「小雅」に淵源を發していると高く評価している。

晉步兵阮籍詩。其源出於小雅、無雕蟲之功。而詠懷之作、可以陶性靈、發幽思。言在耳目之内、情寄八荒之表。洋洋乎會於風雅、使人忘其鄙近、自致遠大。頗多感慨之詞。厥旨淵放、歸趣難求。顏延年注、怯言其志。(晋の步兵・阮籍の詩、其の源は小雅に出で、雕蟲の功無し。而して詠懷の作は、以て性靈を陶し、幽思を發すべし。言は耳目の内に在るも、情は八荒の表に寄す。洋洋乎として風雅に會ひ、人をして其の鄙近を忘れ、自ら遠大を致さしむ。頗る感慨の詞多し。厥の旨は淵放にして、歸趣求め難し。顏延年の注は、其の志を言ふに怯ず。詩品・上品)

阮籍の詩を明確に「詠懷之作」と名づけたとみることができ文章であろう。鍾嶸が『詩品』をいつごろ完成したのか、その年代を確定できないようだが、『詩品』に名を連ねる詩人のうち、没年の不明な人物を除いて、最後に亡くなったのは、梁の天監十二年(五二二)死亡の沈約だから、その年から著者鍾嶸の推定没年の天監十七年(五一八)までの四、五年間に著わされたことは、ほぼ確実である。六世紀初頭(斉朝の末年頃、論者注)に完成した梁代のもう一つの文学評論の傑作『文心雕龍』より

は、およそ十数年おくれて世に出たことになる⁽¹²⁾と指摘されているので、『文選』の「詠懷」の詩題設定より十年も早いことになる。『文選』は大通元年(五二七)以降、編纂されたとされているから⁽¹³⁾。

だから、陳伯君氏の「詠懷」之名、疑為梁昭明太子蕭統選錄十七首所加。の説は、そのままでは成立しなくなる。では、『文選』編纂時より早い詩題「詠懷」の成立は、どこまで遡りうるのであろうか。

鍾嶸の『詩品』には端的に「阮籍詠懷」とあったが、劉勰『文心雕龍』には「詠懷」「述懷」の語は見当たらない。阮籍の名は「明詩篇」に「唯だ嵇志は清峻にして、阮旨は深なり。故に能く標す。」と「才略篇」「嵇康は心を師として以て論を遣り、阮籍は氣を使ひて以て詩に命ず。聲を殊にすれども響を合し、翻を異にすれども飛を同じくす。」これらの高い評価は、つねに嵇康(二三三〜二六二)との対句のなかでなされ、とくに阮籍についてはその詩についての称賛のことばとなっている。しかし、阮籍の五言詩のことを「詠懷」とか「述懷」とか呼称していない。ただ、「隱秀篇」中の今では明代の偽撰とされている文中に、

叔夜之□□、嗣宗之□□、境は玄に思は澹かにして、獨り優閑を得たり。

とあり、この「嗣宗の□□」を「嗣宗の詠懷」としているのは明代万曆三十七年(一六〇九)謝兆申跋、天啓二年(一六三二)梅慶生識語のある明刊『文心雕龍』だけである。孤証信じがたきもので、宋齊時代以前に「詠懷八十餘篇」が一般的呼び方となっていたとは断定しかねる。

六

だとすれば、鍾嶸『詩品』以前において、一体誰が「詠懷」詩と称え

始めたのであろうか。『文選』以前に編輯された「総集類」が後世に伝えられていれば、第一次的資料として利用でき「詠懷」の呼び名の由来も判明していたかも知れない。それは現在のところ不可能であるが、最近指摘されている『文選』の編纂に関する実態状況の解明は、「詠懷」の詩題定立について示唆に富むものであり、ここに岡村繁氏の「『文選』編纂の実態と編纂當初の『文選』評價」から引用する。

『文選』の大部分から、沈約の『集抄』十卷・丘遲『集抄』四十卷、および昭明太子と劉孝綽自身による『詩苑英華』二十卷等、先行の諸選集の中から更に然るべき詩文作品を採録した第二次選集であるらしいことを指摘した。また私は、併せて最近の清水凱夫論文を取り上げて、劉孝綽こそが『文選』編纂に主動的役割を果たした文人であり、その作品撰録には多分に彼の個人的な好悪や愛憎等が加わっていたとする、その卓抜な論證結果に賛同した⁽¹⁵⁾。

まず、『文選』の実際上の編纂であったとされる劉孝綽(四八一〜五三九)であるが、「彈劾によって免官の憂き目を見ることになった」その後も当然のごとく阮籍の五言「詠懷詩」を心中に思い浮かべながら次のような「夜、眠を得られず詩」を詠じたのである。

夜長愁反覆	夜長くして	愁ひ反覆し
懷抱不能裁	懷抱	裁つ能はず
披衣坐惆悵	衣を披りて	坐して惆悵し
當戶立徘徊	戸に當りて	立ちて徘徊す
風音觸樹起	風音	樹に觸れて起り
月色度雲來	月色	雲を度りて來たり
夏葉依窗落	夏の葉	窗に依りて落ち
秋花當戶開	秋の花	戸に當りて開く

光陰已如此 光陰 已に此くの如し

復持憂自催 復た持して 憂ひ自から催す

このように劉孝綽の五言詩にも阮籍詠懷の影響は顯著であり、『文選』編纂時、「詠懷詩」十七首を選録した必然性があつた。

次に沈約(四四一〜五一三)は、『文選』注に李善によって「沈約注」が引用されている。彼にも阮籍の五言詩への愛着が並ならぬものがあつたはずである。沈約は先ず『文選』詠懷其七(其十八)に次のごとく注している。

感物懷殷憂 物に感じて 殷なる憂ひを懷き

悄悄令心悲 悄悄として 心をして悲しましむ

多言焉所告 多言 焉れに告ぐるところぞ

繁辞將訴誰 繁辞 將た誰にか訴えん

沈約曰重言之、猶云、懷哉懷哉。(之を重言すれば、猶ほ「懷ふかな懷ふかな。」と云ふがごとし。)

次に、『文選』詠懷其十二(其二〇)の終末部に、

小人計其功 小人は其の功を計り

君子道其常 君子は其の道を道とす

豈惜終憔悴 豈に終に憔悴するを惜しまんや

詠言著斯章 詠じて言に斯の章を著す

沈約曰「豈惜終憔悴」蓋由不應憔悴而致憔悴、君子失其道也。「小人計其功」而通、「君子道其常」而塞、故致憔悴也。因乎眺望多懷、兼以羈旅無匹、而發此詠。(「豈に終に憔悴するを惜しまんや」とは、蓋し心に憔悴すべからずして憔悴を致し、君子其の道を失ふなり。「小人は其の功を計りて」通じ、「君子は其の常を道として」塞ぐ、故に憔悴を致すなり。眺望するに懷ひ多きに因り、兼ねるに羈旅に匹無きを以てして、此の詠を発す。)

す。

沈約も「發此詠」と注して、しかも、それは「眺望多懷」に接続する文脈で漠然とではあるが「詠懷」ということばを連想させる。溯つて同じく沈約注に「懷哉懷哉」と述べていることからすれば、「此詠」が本作品を指すにしても、この時、阮籍の五言の詩作を「詠懷」とする印象批評があり得るところまで読まれていたことになるのではないか。

さて沈約と同世代の詩人に江淹(四四四〜五〇五)がいるが、沈約と同じく劉宋に生を享け、挫折を体験しながらも、齊・梁へと生きのびる。

宋末、後に齊の高帝となる蕭道成にその文才を見込まれ、齊朝において、中書侍郎、尚書左丞、御史中丞等を歴任するが、宋末、後に梁の武帝となる蕭衍が起兵すると、今度はへつらつて新朝に依附する。梁朝に入つても顯赫の地位を重ねて、卒する時の官は金紫光祿大夫に上り、醴陵伯に封じられたといわれる。その彼も青年時代、つかえていた建平之劉景素に対し、その野心を再三諫め続けたが、聞き届けられず、遠ざけられ建安吳興令に貶せられる。彼は「阮公の詩に効ふ・十五首」を作つて諷したといふ。¹⁶⁾

歲暮懷感傷 歲暮 感傷を懷き

中夕弄清琴 中夕 清琴を弄ぶ

戾戾曙風急 戾戾として 曙風急なり

團團明月陰 團團として 明月陰る

孤雲出北山 孤雲 北山より出で

宿鳥驚東林 宿鳥 東林に驚く

誰謂人道廣 誰か謂はん 人道広しと

憂慨自相尋 憂ひと慨きと 自ら相尋ぎ

寧知霜雪後 寧ぞ知らん 霜雪の後

独見松竹心 独り松竹の心を見るを

この詩、第一聯と第三聯とに明の胡之驥『江文通集彙註』は阮籍「詠懷」其一を指摘しているように、詩語の用い方がまだ生硬である。結末部に「松竹の心」を用いているのは若気の至りではないか。諷諫が直接的過ぎるであろう。しかし、江淹の詩作は後世から「擬古最優」と評価されるのであり、その「雜體詩三十首」は『文選』卷三十一「雜擬」下の大半を占める。この連作三十首は先の「效阮公詩十五首」より後に作られている。「效阮公詩」は確かにまだ宋代中に作られた若年の習作というべきものに対し、五世紀末までには完成していたものとみられる「雜體詩三十首」は漢から宋まで三十家の詩人の代表策を摹擬しながら、それらの主題と意味とまで、それぞれ異なる風格の特徴まで再現せんとした、江淹の文学的力量を示すに足る作品であった。これは江淹が後に位、人臣を極めるほどに「江郎才尽きぬ」と文学的才能を示すことがなくなる以前の代表的作品であり、齊から梁初にかけての作品と考えられる。この三十首中の一首がすなわち「阮步兵詠懷」である。

青鳥海上遊	青鳥	海上に遊び
鸞斯蒿下飛	鸞斯	蒿下に飛ぶ
沉浮不相宜	沈浮	相宜しからず
羽翼各有歸	羽翼	各々歸有り
飄飄可終年	飄飄	して年を終ふべし
沉澹安是非	沉澹	安くんぞ是非あらん
朝雲乘變化	朝雲	變化に乘じ
光耀世所希	光耀	世の希とする所
精衛銜木石	精衛	木石を銜むも
誰能測幽微		誰れか能く幽微を測らんや

これは、阮籍の五言詩を「詠懷詩」であると認識しての阮籍五言詩への総評といふべきものである。『阮籍集』に見当らぬ「精衛」という詩語を使って、難解なる阮籍「詠懷」を「精衛銜木石、誰能測幽微」としたのは美事といふべきであろう。阮籍「詠懷」李善注の「其の體趣を觀するに、實に幽深たり。夫の作者に非ざれば、之を探り測る能はず」と先取りした詠い方である。この作品に「阮步兵籍詠懷」と江淹は題している。江淹「雜體詩三十首」が喧伝されれば、自ずと「阮步兵詠懷」その呼称が定立して来たのではなからうか。ここに始めて「阮籍詠懷詩」の呼び名が誕生したと考えられよう。それは齊末梁初と考えられる。

なお、前述した鍾嶸の「詩品」序の「阮籍詠懷」の称は、彼が江淹「雜體詩三十首」を参考にし、「ことに二字で作品の内容を概括しようとする点は、江淹にならった可能性が強い」⁽¹⁷⁾のであり、江淹の「阮步兵籍詠懷」をそのまま継承したものである。

かくて江淹「雜體詩三十首」をも収載する昭明『文選』は、江淹の「阮步兵籍 詠懷」と阮籍「詠懷詩」十七首によって、「詠懷」という詩題を成立させたのである。

(一九八八年七月二〇日初稿 一九九二年九月九日改稿)

注

(1) 吉川幸次郎「阮籍の『詠懷詩』について」(二)(三)は、本詩と「その他、其の十八の『彼の桃李の花を視るに、誰か能く久しく榮發たらん』其の四十四の『榮發たる桃李の花、蹊を成しては將に天傷せんとす』其の五十の『清露は凝霜と成り、華草は蒿と成る』其の八十二の『墓前の榮發たる者、木植は朱華を耀かす。榮好未まだ終朝ならざるに、連翹其の葩を隕とす』みなお

なじ比喻である。」と指摘する。

- (2) 原文：曾國藩曰「此與四十四首、七十一首語意重複、別無精義、疑亦後人附益之也。」

- (3) その他、「阮籍がみずからの詩に詠懷と題した」(林田愼之助「阮籍詠懷考」とする論文等もかなり見られる。

- (4) 原文：李夢陽序刊本『阮嗣宗詩』一卷序「今以故所抄籍詠懷詩八十篇刊諸此、訛缺姑仍之。」(上海古籍出版社「阮籍集」一九七九引用)

- (5) 原文：吳懋謙「長安詠懷」序曰「阮步兵詠懷詩八十二首、時值魏晉、文隱旨遠、人不易測。戊戌客都門、聞見甚衆詠懷、亦如其數以近体別之。雖才與識百不逮步兵、姑存其意而已。」(『過日集』清曾燦編、康熙二十二年序刊 卷十)。

- (6) 『岡村繁教授退官記念論集 中国詩人論』(汲古書院一九八六) 収載。

- (7) 例えば後述する支遁の「詠懷詩」其二にも「詠發清風集、觸思皆恬愉」とある。

- (8) 『中国古典詩聚花 思索と詠懷』(小学館 一九八五)。

- (9) 原文：高僧伝曰「宗常在廣陵白土埭。渴球謳唱。引絃以自欣暢。得直隨以施人。時高平檀祗爲江都令、聞而召來。應待機捷、無所拘滯。博達稽古、辨說玄儒。乃賦詠懷詩一首。檀祗知非常人、遣還所在。遺布二十疋、悉以乞人。」

- (10) 『文学論集』(興善宏・荒井健 中国文明選13 一九七二) 詩品「解題」(興善宏)。

- (11) 前掲(10)「詩品序」。

- (12) 前掲(10)「詩品」解題。

- (13) 岡村繁「『文選』編纂の實態と編纂當初の『文選』評價」(日本中国学会報第三十八集 一九八六)。

- (14) 劉勰『文心雕龍』中の阮籍に言及する文章は次のごとくである。

「唯嵇志清峻、阮旨遙深。故能標焉。」(明詩)

「嵇康師心以遺論、阮籍使氣以命詩。」(才略)

「嗣宗傲儻、故響逸而調遠。叔夜儒俠、故興高而采烈。」(体性)

「時正始餘風、編體輕澹、而嵇阮應繆、並馳文路矣。」(時序)

「叔夜之□□、嗣宗之詠懷、境玄思澹、而獨得乎優閑。」(隱秀)

- (15) ここに指摘がある「清水凱夫論文」は、「文選中の梁代作品撰録について」

『學林』第一号、「『文選』撰者考——昭明太子と劉孝綽——」(『學林』第三号、「文選編纂の目的と撰録基準」(『學林』第四号)、「文選編纂の目的と撰録基準」(『立命館文學』第三七七・三七八合併号)である。なお論者は清水氏の『文心雕龍』の『文選』への影響」という論文も、今次目録した。

- (16) 高橋和巳「江淹の文学」(『吉川博士退休記念論文集』(筑摩書房 一九六七)によれば「宋の後廢帝の元徽二年(四七四)建平王が叛乱をくだでているのを察知したとき、この連作十五首を作った。)

- (17) 前掲(10)「詩品序」。

- (18) 『文選』卷三十一李善注は、阮籍の「清思賦」から「女娃、東海の濱に耀榮し、西山の旁に翩翩す」とこれらの表現の典拠である『山海經』北山經から「發鳩の山、鳥有り、名は精衛。赤帝の女娃なり。女娃東海に遊び、溺れて死し返らず。化して精衛と爲る。常に西山の木石を取りて以て東海を填めんとす。」を引用する。

- (19) 前掲(10)「詩品序」。興善宏氏は、江淹「雜體詩」三十首の詩題と鍾嶸「詩品」の挙例との対照表を附せられ参考になる。

(一九八八年七月二〇日初稿 一九九二年九月九日改稿)